

戦後「平和国家」の成立と展開

賀川豊彦の働きをめぐって

森 島 豊

はじめに

敗戦後の日本において「平和国家」は日本人のアイデンティティとなっている側面があり、立場の相違に関わらず「平和国家」という共通の用語が用いられている¹。歴史学者の和田春樹は戦後日本の原点である「平和国家」に関する認識を新たにさせ、この標語が「一九四五年九月四日、敗戦後最初の帝国議会開会にさいして天皇が発した勅語において打ち出されたもの」という事実を発見した²。またその平和思想が終戦詔書の「萬世ノ爲ニ太平ヲ開カム」の「太平」に遡るとして、戦後の平和国家日本の方針が、GHQからの押しつけではなく、天皇に由来する「非武装非戦の国家」という日本の主体的決断であったと主張した³。

1 「平和国家」に注目して日本をとらえようとする先行研究には以下のものが挙げられる。五十嵐武士『「平和国家」と日本型外交』『戦後日本 占領と改革 第六卷』（岩波書店、一九九五年）。古関彰一『「平和国家」日本の再検討』（岩波書店、二〇〇二年）。和田春樹『「平和国家」の誕生——戦後日本の原点と変容』（岩波書店、二〇一五年）。古関彰一『平和憲法の深層』（ちくま書房、二〇一五年）。酒井哲哉編『平和国家のアイデンティティ』リーディングス 戦後日本の思想水脈1（岩波書店、二〇一六年）。福永文夫『「平和国家」はどのように語られてきたか——「平和国家」論の位相』『獨協法学』第一〇二号（獨協大学法学会、二〇一七年）一—五六頁。高見勝利『「平和国家」の確立』から「平和憲法の公布」まで——9.4勅語と11.3勅書の間』『歴史学研究』No. 962（續文堂出版、二〇一七年）二—一二頁。

2 和田春樹『「平和国家」の誕生——戦後日本の原点と変容』（岩波書店、二〇一五年）x頁。和田春樹『戦後日本平和主義の原点』『思想』第一二号（岩波書店、二〇〇二年）参照。

3 和田春樹『「平和国家」の誕生』九一頁。この研究はその後、朝日新聞の上丸洋一、

筆者は和田の研究に基づいて終戦詔書の「萬世ノ爲ニ太平ヲ開カム」という用語の挿入過程に注目し、その思想的内実が戦前の国体思想に一致することを確認した⁴。この事実は「平和国家」が戦前の国体の戦後版に等しいことを意味する。実際に開院式勅書の起草文に「平和国家」の文言を挿入した敗戦後最初の首相東久邇宮稔彦は、第八十八回帝国議会の施政方針演説の中で終戦詔書の「万世ノ為ニ太平ヲ開カム」の実現として戦後の方針を主張した。さらに、筆者は東久邇宮がこの思想を満州事変の首謀者である石原莞爾の影響を受けていたことも実証し、国体思想における戦前と戦後の連続性という傍証を固めた⁵。

本論では、昭和天皇の唱導による「平和国家」の文言を自覚的に継承した知識人たちを通して、その受容と展開の形跡をたどり、如何にしてこの用語と理念が民衆に浸透し、また昭和天皇との関係が忘れられていったのかを確認する。ここではその最初の一人として賀川豊彦に注目する。

第一節 賀川豊彦

昭和天皇による開院式勅語の「平和国家」に反応した知識人は複数いるが、この理念と方針を最も早い段階で自覚的に受容し、民間人に浸透させる使命感をもって働きかけたのは、キリスト教徒の賀川豊彦である⁶。

NHKの塩田純によってメディアに取り上げられ、憲法制定史の第一人者古関彰一にも受け入れられ、戦後「非武装非戦の国家」という日本再建の原点が天皇と国民によっていたことを積極的に評価された。古関彰一『平和憲法の深層』参照。上丸洋一『新聞と憲法9条——「自衛」という難題』（朝日新聞出版、二〇一六年）参照。塩田純『9条誕生——平和国家はこうして生まれた』（岩波書店、二〇一八年）参照。

4 拙論「戦後平和思想に潜む伝統思想 I ——天皇勅書と平和国家——」『キリスト教と文化』（青山学院大学宗教主任研究叢書）第三十六号、八九—一一四頁、二〇二一年。「戦後平和思想に潜む伝統思想 II」『キリスト教と文化』第三十七号、二〇二二年三月。

5 拙論「開院式勅語における「平和国家」成立過程——東久邇宮と石原莞爾の国体思想に基づく平和思想の影響——」『青山総合文化政策学』通巻第二一号、第一三巻第一号（青山学院大学総合文化政策学会、二〇二二年）一一—二〇頁参照。

6 戦後の賀川に注目した研究は少ない。本論では、賀川の平和思想も含めて以下のものを参照した。マーク・ゲイン『ニッポン日記』（筑摩書房、一九九八年）初出は一九五一

敗戦後の最初の内閣を担った東久邇宮は石原莞爾の勧めにより賀川豊彦を内閣参与に任命した（正式な任命は九月五日付）。石原は一九二〇年に中国で賀川の講演を聞いており、「賀川氏ノ人ヲ動かス力」に感銘を受けていた⁷。その石原が敗戦後に名指しで期待したのが世界的に有名であったキリスト教徒の賀川豊彦であった。八月二十八日『報知新聞』に掲載された石原のインタビュー記

年。太田雄三「平和主義者としての賀川豊彦」『内村鑑三——その世界主義と日本主義をめぐって』（一九七七年、研究者出版）所収。黒田四郎『私の賀川豊彦研究』（キリスト新聞社、一九八三年）。ロバート・シルジェン『賀川豊彦——愛と社会正義を追い求めた生涯』賀川豊彦記念松沢資料館監訳（新教出版社、二〇〇七年）初出は洋書 *Toyohiko Kagawa : Apostle of love and social justice* (Centenary Books, 1988)。金田隆一「戦後のキリスト教団、キリスト者グループの戦争責任問題に関連して——賀川豊彦らを中心とする天皇用語と天皇制の本質について」『苦小牧工業高等専門学校紀要』第二四号、（苦小牧工業高等専門学校、一九八九年）。河島幸夫「賀川豊彦と太平洋戦争」『日本キリスト教史における賀川豊彦』所収（初出は「賀川豊彦と八・一五」『福音と世界』[第四五巻九号、新教出版、一九九〇年]、再掲『賀川豊彦と太平洋戦争』[中川書店、一九九一年]）。佐治孝典『土着と挫折——近代日本キリスト教史の一断面』（一九九一年、新教出版社）。倉橋克人「戦後キリスト教の道標——賀川豊彦と戦後天皇制」『キリスト教社会問題研究』四四号（同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会、一九九五年）六七—一〇四頁。布川弘「一九三〇年代における賀川豊彦の平和運動」『日本史研究』第四二四号（日本史研究会、一九九七年）五五—七六頁。大井浩一『メディアは知識人をどう使ったか——戦後「論壇」の発効』（勁草書房、二〇〇四年）。米沢和一郎「賀川豊彦の戦後」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第四〇号（明治学院大学キリスト教研究所、二〇〇七年）二二七—二六六頁。米沢和一郎「賀川豊彦の戦後（2）」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第四一号（明治学院大学キリスト教研究所、二〇〇八年）二二三—二六一頁。小南浩一「賀川豊彦と世界連邦運動」『法政論叢』第四四巻二号（日本法政学会、二〇〇八年）六八—九二頁。小南浩一『賀川豊彦研究序説』（緑陰書房、二〇一〇年）。倉橋克人「賀川豊彦についての先行研究」『日本キリスト教史における賀川豊彦』所収。戒能信生「敗戦直後の賀川豊彦」『日本キリスト教史における賀川豊彦』（二〇一一年、新教出版社）所収。遠藤興一「転向と懺悔——賀川豊彦における戦前と戦後の接点」『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』第一四七号（二〇一七年、明治学院大学社会学部）六三—一四二頁。遠藤興一「賀川豊彦における戦前と戦後のぼさま」『現人神から大衆天皇制へ——昭和の国体とキリスト教』（刀水書房、二〇一七年）所収。

7 『石原莞爾選集1——漢口から妻へ』（たまいらば、一九八五年）一二四頁（大正九[一九二〇]年九月一日付）。一二五—一二六頁も参照。小南浩一『賀川豊彦研究序説』二五二—二五三頁注六参照。

事も以下の言葉で結んでいる。

キリスト教も救世軍もこれからはどんどん活動して戴いて賀川豊彦先生あたりから日本の公正な輿論をアメリカに通じて戴きたい。⁸

東久邇宮は「石原莞爾も、賀川豊彦のような人を内閣顧問にしたらよいと、私にいった⁹と、石原の助言から賀川を内閣に任命したと証言している¹⁰。しかし、賀川の起用目的は、石原の言葉にあるように、アメリカと民間人への知名度と影響力にあったと考えられる。東久邇宮も賀川を入閣させる経緯について「私が内閣参与をつくったのは、官僚組織を経ずして直接、民間の意向を私に反映させ、また私の意思を直接、民間に反映するようにするためだった」という文脈で説明する¹¹。大井浩一は賀川を「メディアの寵児^{〔ちやうじ〕}¹²と表現したが、アメリカで圧倒的な知名度¹³のあった庶民的平和主義者賀川豊彦は、「太平洋をめぐる国際間の悪感情払拭のため」¹⁴日本政府の方針をアメリカと民間人に伝

8 『読売報知』一九四五年八月二八日、一頁。

9 東久邇稔彦『東久邇日記』二三〇頁。

10 賀川豊彦と内閣とのつながりについては、東久邇宮内閣で厚生大臣兼文部大臣をしていた松村譲二の以下の証言もある。「ある日、大臣室に賀川豊彦さんがたずねてきた。賀川さんと私は、たがいに以前からの深い知合いではなかったが、このような非常時を見かねて、私をたずねて来てくれたのである。そして賀川さんは『こういう時節ですから、私で何か役に立つことがあれば、なんでも喜んでお手伝いをいたします……』と言われる。そこで、私は考えた。賀川さんその人は、人道の戦士、愛の殉教者として尊敬されている堅い信念のクリスチャンであり、とくにアメリカでは、日本人にまれな人道主義者として、非常な信望を得ている人だ。よし、ひとつ賀川さんの力を借りようと思案した」。松村譲二『松村譲二 三代回顧録』武田知己編（吉田書店、一九六四年）二五五―二五六頁。

また遠藤興一によれば、官僚で皇室との関係が深く、戦後は枢密顧問官であった関屋貞三郎の中に、関屋も賀川の登用を勧めたことが記されている。『関屋貞三郎日記』一九四五年九月一日条。遠藤興一「転向と懺悔——賀川豊彦における戦前と戦後の接点」一〇七頁参照。

11 東久邇稔彦『東久邇日記』二三〇頁。

12 大井浩一『メディアは知識人をどう使ったか』二〇頁。

13 大宅壮一「賀川豊彦論」『大宅壮一全集 第六卷』（蒼洋社、一九八一年）三二九―三三一頁参照。大井浩一『メディアは知識人をどう使ったか』二一―二四頁参照。

14 「政府と国民の“直結機関” 首相幕僚に民間人 賀川氏ら5氏囑託に就任」『読売報知』（一九四五（昭和二〇）年九月四日）一頁。

える格好の広告塔であったのであろう。

第二節 東久邇宮と賀川豊彦の会談

八月二八日、賀川豊彦は東久邇宮に呼び出されて首相官邸で三〇分面談し¹⁵、内閣参与を依頼され承諾した。ここでは両者の会談の記録を照査していくが、結果として賀川の起用により東久邇宮の取り組みは、民間運動による平和運動の促進という側面が強く表れた。

東久邇宮の日記原本にはこの日の面談について詳しい内容の記述がないが、十一月九日の米国教会使節団の訪問時に賀川との最初の面談の回想が述べられている。そこでは東久邇宮が賀川に「国民の道徳を向上し、道義と文化の高き平和的新日本を建設」することと「キリスト教に依り世界各國間にくしみを一掃し世界永遠の平和を確立」することを依頼したと記している¹⁶。ここに「平和国家」の文言の由来となる「平和的新日本を建設」という言葉が出てくるが、東久邇宮の日記ではこの言葉がアメリカのキリスト教団代表者との面談の様子を説明する文脈で使用されている。一九四七年に出版した『私の記録』でも「平和日本の建設」という文言が使われるが、これも九月二〇日の外国人宣教師訪問を受けての回想である。賀川には「道義の昂揚」を依頼しても「平

15 三〇分という時間は日記原本に拠る。「東久邇宮日記」一九四五年八月二八日。東久邇稔彦『東久邇日記』二二四頁参照。なお、面談の日付について賀川側の資料には二六日となっている。賀川は九月二四日のラジオ放送で「去る八月二六日、東久邇首相官殿下の御召しを受けて」と語っており、九月発行の『火の柱』に掲載された賀川の動向でも「八月二十六日、首相官殿下よりの思召により賀川先生は内閣に出頭」とある。また後の回想（『社会革命と精神革命』）では二七日と記述が揺らいでいる。しかし、木俣敏の日記には二八日となっているので、おそらく賀川の記憶違いであろう。賀川豊彦「道義と平和の道」『賀川豊彦全集 第二四巻』（キリスト新聞社、一九六四年）所収、四一九頁。『火の柱』（一九四五年九月号）賀川豊彦関係史料双書3、第三巻復刊第一号一八九号（緑蔭書房、一九九〇年）所収、三〇頁。横山春一『賀川豊彦傳』（警醒社、一九五九年〔初版キリスト新聞社、一九五一年〕）四一一頁参照。「木俣敏終戦日記」戒能信生解説『賀川豊彦研究』五七号（本所賀川記念館、二〇一一年）五三―五五頁参照。

16 「東久邇宮日記」一九四五年十一月九日。

「平和的新日本建設」の言及がない。そこでは以下のように記されている。

私は、平和日本の建設のために、戦争によつてすたれた日本の道義を再建するために、宗教の力をかりたいと考えていた。……それで、組閣直後、賀川豊彦氏に来てもらつて——道義日本が荒廢したから、キリスト教をもつて、道義の昂揚に努力してほしい。それから憎しみを去つて、日米及び諸外國との親善關係の回復をはかつてほしい。との二點について同氏に努力を依頼した。¹⁷

一方、一九六八年に出版された日記には賀川との面談日に記録があり、「私〔東久邇宮〕は『戦時中、国民の道義心が低下したから、キリスト教を通じて、道義心の向上に努力してもらいたい』と依頼したところ、賀川は引受けてくれた」¹⁸と記してある。ここでは「平和的新日本建設」と「にくしみを一掃」に関する言及が抜け落ちている。

賀川の証言を見ると、『火の柱』（一九四五年九月）にある賀川の動向報告に「八月二十六日、首相宮殿下よりの思召により賀川先生は内閣に出頭、殿下に拝謁を仰せつかり戦争終結に際し、道義の低下退廢せる祖國を宗教の宣布に依り救ひ、道義日本の昂揚のためにつとめ、同時に聯合國を始め全世界に対し憎みを去ることに留意せよと御言葉を賜ひ御前を退下、首相の政治幕僚内閣参議として活躍することとなつた」とある¹⁹。一九四五年九月二四日のNHKラジオ放送では東久邇宮から「我国の道義新生運動に努力せよとの御言葉を承り、更に又我が国及び我が国を囲む諸国との間に憎しみを取り去るよう努力せよとの御命令を受けた」と述べられており、それに対して「私はその殿下の御言葉をこゝに新しく諸君にお取次し、日本のあらゆる階級の人々が新しき懺悔をもつて、低く落ちたる道義を恢復し、世界平和の為に努力せんことを祈るもので

17 東久邇宮稔彦『私の記録』（東方書房、一九四七年）二二一—二二二頁。

18 東久邇宮稔彦『東久邇日記』二四四頁。

19 八月二六日とあるが二八日の誤りであろう。『火の柱』第四號（一九四五年九月）賀川豊彦関係史料双書三、第三卷復刊第一号一八九号（緑蔭書房、一九九〇年）所収、三〇頁。

ある」²⁰と語っている。一九四八年の著作には更に詳しい経緯を以下のように記している。

「終戦直後、一九四五年八月二十七日^{〔ママ〕}、私は当時の東久邇宮首相宮殿下の御召をうけた。お伺いすると『自分は皇族で政治に参加しない方がよいけれど、終戦の関係上許してもらひたい。私は日本は道義が廃頹した故に戦争に負けたと思ふ。それであなたはキリスト教の信仰をもつて、国民の道義を高揚していたゞきたい』と依頼された。そこで私は、『殿下、近衛内閣時代、国務大臣堀切善次郎氏が国民精神総動員を企てられたが失敗であった。精神運動は民間でやり、下から盛りあがるのでなければならない。殿下は総理大臣をおよしになつても精神運動をつゞけられるおつもりでありますか』と伺つた。『生涯つゞける』といふお約束をいただき、私はお引受した。

殿下は更に『もう一つ願がある。日本人には人を恨むくせがある。で恐らく英米ソなどに対して永く復讐しようとするであらうから、キリスト教の敵を愛する精神を、教へてもらひたい。また君には外国人に友人が多いから彼等も日本人を憎まず、キリストの精神で取扱ふやう頼んでいたい』と依頼された。そこで私は一も二もなくお引受けをした。』²¹

傍証を加えると、『世界連邦運動二〇年』（一九六九年）には両者のやり取りを以下のように記している。

東久邇は賀川にたいし二つのことを諮問した。

「その一つは、日本の道義は、敗戦によって地に墜ちてしまった。日本再建のためには、まず日本人をこの道義の退廃から振り起たせねばならぬ、それにはどうしたらよいか。つぎは、日本が生まれかわるためには従来の外国人にたいする敵がい心や憎悪の念を一掃し、世界平和をめざして進ま

20 賀川豊彦「道義と平和の道」『賀川豊彦全集 第二四巻』（キリスト新聞社、一九八三年〔一九六四年〕）四一九頁。

21 賀川豊彦「社会革命と精神革命」『賀川豊彦全集 第四巻』（キリスト新聞社、一九八一年〔一九六四年〕）二七八頁。

ねばならぬ。日本がこれから国際社会に復帰して世界の平和に貢献するにはどうしたらよいか」

これにたいし、賀川はつぎのように答えた。この両者とも極めて重要な問題であるが、政府みずから、これをおこなうならば、国民はかならず反発し、かえって道をあやまることになる。かならず民間の運動としておこなうべきであり、しかも、その根本は教育の問題であると。

賀川は東久邇の信託に応えるため二つの財団法人をつくった。一つは「道義新生会」であり、もう一つは「国際平和協会」である。²²

これらの証言から、東久邇宮が賀川に依頼した内容はキリスト教を通した国民の道義心の向上と欧米諸国の憎悪の念を取り去り親善関係を構築することであった。そしてこの依頼には、「平和的新日本建設」という文言がなかった。一方、賀川はその依頼に「世界平和の為に努力せんことを祈る」と応えている。つまり、東久邇宮は賀川に道義心の回復と諸外国との親善に期待をしており、平和国家建設について依頼していなかったが、賀川の方法論が平和運動であったので、後にこの方面が全面に出たのではないかと考えられる。賀川はこの課題を民間運動として取り組むために日本基督教団と設立した二つの財団（「道義新生会」「国際平和協会」）を通して働きかけた。

第三節 賀川豊彦における理念としての平和国家

戦後賀川を取り組みを辿る前に、内閣参与としての彼の平和運動が「平和国

22 世界連邦建設同盟編『世界連邦運動二十年史』（世界連邦建設同盟、一九六九年）八〇―八一頁。

横山春一は賀川との面談における東久邇宮の言葉を以下のように報告している。「日本の道義が地におちて、誰もこれを救ふ力がない。どうか、あなたに十分の活動をしていただきたい。外国人への敵愾心と憎悪を拂拭しなければ、ポツダム宣言の履行もできない。世界平和を目ざして諸外国と日本とをむすぶために活動する資格のある者は他にゐない。これもあなたに御盡力願ひたい。私が主班になつてゐる内閣も、今のままの組織では、到底アメリカを満足させることはできない。それで新しく内閣に參與制度をつくりたい。あなたもぜひ參與となつてもらひたい」。横山春一『賀川豊彦傳』四一―頁。

家」の理念に基づいていたことを確認したい。

戦後日本の「平和国家」という文言が昭和天皇の開院式勅語に由来し、その成立過程から勅語起草に関わった東久邇宮の「平和的新日本ヲ建設」という文言挿入に遡ることはすでに述べた。その文言に石原莞爾の影響があることを突き止めたが、東久邇宮は石原にはなかった発想を展開した。それが終戦詔書の「太平」との連続性である。

東久邇宮は第八十八回帝国議会の施政方針演説の中で、終戦詔書の「萬世の為に太平を開かせ給うた」ことを基軸にして、これからは「平和的新日本の建設」することを内外に宣言した²³。これにより、戦後「平和国家」という日本再建の方針は、終戦詔書の「万世ノ爲ニ太平ヲ開カム」に基づく展開という形を取ることになる。石原莞爾の平和思想も、「太平ヲ開カム」を挿入した安岡正篤の思想も戦前の国体思想に基づいているため、戦後「平和国家」は思想的に戦前の国体思想を意味する。ただし、石原莞爾の敗戦直後の記述には「太平ヲ開カム」と「平和的新日本の建設」を結びつけた文言が見当たらないので、両者を結びつけたのは東久邇宮または施政方針演説を起草した緒方竹虎と考えられる。

一方で、敗戦直後から理念として両者を結びつける言動をしていたのが賀川豊彦である。『火の柱』（一九四五年九月号）に敗戦直後の八月一九日に松沢教会で行われたと考えられる説教が掲載されている²⁴。そこでは「世界連邦制度の創造」が主張され、「如何にすれば、世界に戦ひなく公正なる政治が行はれるかと云うことを研究する必要がある」と述べて、次の言葉が続く。

我が公明なる今上陛下は「萬世ニ太平ノ道ヲ開ク」と云ふ御精神をもつて、ポツダム宣言を受諾遊ばされ、大詔を降し給ふたのであるから、我々

23 「第八十八回貴族院帝国議会議事速記録第二号」一九四五年九月五日（『官報』号外、一九四五年九月六日）。[国立国会図書館デジタルコレクション]

24 賀川豊彦「世界連邦制度の創造」『火の柱』第四號（一九四五年九月）賀川豊彦関係史料双書三、第三巻復刊第一号一八九号（緑蔭書房、一九九〇年）所収、二七―二九頁参照。「木俣敏終戦日記」五〇頁参照。

もこのポツダム宣言のみを考へると暗いがその背後にある制度の徹底を期する爲に陛下の大御心を拝しこれに従ひ奉らねばならない。²⁵

そして説教の言葉は以下の言葉で結ばれる。

日本の前途の爲、万世太平の御精神をもつて、破滅の一步手前でグッとお止めになつた。今上陛下の大御心は実に御聖断である。

歴史は必ず承認する。我々は敢く迄、陛下の大御心を体し、大きな理想を持ち、道義日本、文化日本、科学日本の再興の爲にその礎とならねばならない。²⁶

この文章は九月に掲載されたので、もしかすると「道義日本、文化日本」という文言は文脈から唐突であるため東久邇宮との会談後に加筆したかもしれないが、「万世太平の御精神」を重んじる姿勢は敗戦直後の文脈に合致しているため、実際に語られたと考えられる。

戦後日本の再出発を天皇の「万世太平の御精神」に基づかせる理解は、東久邇宮と会談した直後の八月三〇日『読売報知』に寄稿した「マッカーサー總司令官に寄す」にも表れている²⁷。そこで主張されたことは「陛下の詔書によってピタッと一変して日本は次の時代へ進行しはじめた」という玉音放送の効果であり、「陛下の詔書によって戦争から平和へ完全に変向しました」²⁸と終戦詔書による平和への移行が強調されていた。重要なことは、戦後日本の「戦争から平和へ」という方針が終戦詔書に表された天皇の意思に基づいていることを再三確認していることである。「陛下の御明示の如く世界文化への貢献、世界平和への奉仕へと直ちに回心した」日本は、「いま詔書のお示しのままに立派な世界国家として出発しようと」しており、マッカーサーに「新文化新世界へ邁進する日本」へのサポートを訴えている²⁹。この言葉からも分かるように、

25 賀川豊彦「世界連邦制度の創造」『火の柱』第四號（一九四五年九月）二七頁。

26 賀川豊彦「世界連邦制度の創造」『火の柱』第四號（一九四五年九月）二九頁。

27 賀川豊彦「マッカーサー總司令官に寄す」『読売報知』一九四五年八月三〇日、二頁。

28 賀川豊彦「マッカーサー總司令官に寄す」二頁。

29 賀川豊彦「マッカーサー總司令官に寄す」二頁。

賀川は終戦詔書の「太平を開く」という昭和天皇の意思に共感して戦後の平和運動を展開する。

ちなみに、「平和国家」という文言は、東久邇宮が挿入した「平和的新日本ヲ建設」という一句を川田瑞穂が添削して「平和国家ヲ確立シテ」となった経緯がある。そのため、東久邇宮も「平和国家」ではなく「平和的新日本」という表現を多く用いており、賀川も「平和国家」という表現をあまり用いていない。けれども、「平和国家」の内実は天皇を中心とする争いのない世界を意味しており、戦前の国体思想と結びついているのだが、戦後賀川の平和思想も天皇を中心としており、理念としては「平和国家」と同様であった。つまり、「平和国家」は天皇を中心とする国体護持と結びついており、賀川の平和運動も天皇擁護と直結していた。たとえば、一九四五年十月に掲載された対談では次のように語る。

日本に於ては世界に類のない御仁慈を垂れ給ふ皇室があらせられるし、殊に又萬世に太平を開き給ふ聖旨から、日本を御救ひ下さつたのですから、我々はこの皇室の御精神を體して、無戦世界の建設、世界聯邦國家を組織する大理想を持つて、新日本建設に邁進しなければならぬ。要するに立憲君主政體の下に民主主義といふ基準を立てて進みたいと思ふ。³⁰

同様の趣旨は翌年（一九四六年）に出版された『新生活の道標』でも語られている。

「明治維新以後、日本が組織ある進歩をなし得たのは、全く皇室を中心とする統一性による創造のお蔭であつたといふことが出来る。

保存性については、もう既に述べた修繕性即ち、救済性については昭和二十年八月十五日に我々はつぶさに身に沁々と国民として味はつた。

その八月十五日以後、我国が世界史上にも稀な敗戦の状態とその拾収、進駐軍の接受等々が平靜に行はれたことは国民の等しく銘記するところである。

30 有馬頼寧・賀川豊彦「新日本の建設」（対談）『現代』昭和二〇年十月号（一九四五年、大日本雄弁会講談社）二〇頁。

統一性のあるところ、皇室は社会連帯の表徴であり、国家を救ひ得る力は、万世に太平を開き給ふ救済力として現はれたのであつた。」³¹

一九五七（昭和三二）年の『火の柱』に掲載された当時を振り返った記述にも「私は日本社会黨の組織を手伝い天皇制の存置と食料確保に努力した」³²とあるように、賀川の平和運動は自覚的に天皇制擁護と表裏一体であつたのである。

第四節 民間運動としての平和運動

天皇を中心とする国体を意味した「平和国家」を思想的基盤とする賀川の戦後平和運動は、民間運動として民衆に浸透していく。その手段として用いられたのが日本基督教団と二つの財団（「道義新生会」「国際平和協会」）であつた。

東久邇宮首相と面会（八月二八日）した後の八月二九日午後三時、賀川は首相の「道義回復」という意思を日本基督教団に伝え、その方法について協議する³³。この場で「首相の台臨〔皇族が出席すること〕を仰いで令旨〔皇太子や皇族の命令を出す文書〕傳達の會を開くことと、「國民總懺悔運動」を展開することが決められた³⁴。八月三〇日『読売報知』に先に紹介した「マッカー

31 賀川豊彦「新生活の道標」『賀川豊彦全集 第一三巻』（キリスト新聞社、一九八二年〔一九六四年〕）五二―五三頁。

32 賀川豊彦「神の国運動よりキリスト運動へ」『火の柱』第三九号（昭和二三〔一九四八〕年八月五日）賀川豊彦関係史料双書三、第三巻復刊第一号―八九号（緑蔭書房、一九九〇年）所収、二七八―二七九頁。

33 その場集ったのは、「統理富田満、總務局長鈴木浩二、教學局長村田四郎、傳道局長勝部武雄、主事木俣敏」であつた。「木俣敏終戦日記」五五頁参照。横山春一『賀川豊彦傳』四一一頁参照。

34 「國民總懺悔運動」の方針を提案したのは木俣敏であり、日記には以下のように述べたと記してある。「首相の宮の御要求は全國民の道義の低下を深憂せられてゐるのであるから早急に國民一般に呼びかける必要あり。但し、時局便乗の恐れある事は事実であり、且つ基督者が急に大運動を起せば、『それ見た事か、基督者は敗戦を待ってゐたのだ』と云ふあらぬ誤解を受くる恐れもある。よつて此の大運動はあくまで基督者も國民も過去の偏屈さ、尊大さ、無智さ、道義の低さ、無信仰を懺悔する『國民總懺悔運動』たらしめねばならない。さうすれば浮いた調子もなく、嚴肅な大運動が起こされ、國民の改心も起は

サー總司令官に寄す」が掲載され、「陛下の詔書によつて、戦争から平和へ完全に轉回しました」と述べて、「陛下の御期待にそひ得なかつたことを悔悟し、陛下の御明示の如く、世界文化への貢献、世界平和への奉仕にと直ちに回心した」と訴えた³⁵。九月五日「國民總懺悔運動の外廓の團體として道義新生會の設立準備」が行われた³⁶。草案として作成された五綱領の第一は「我等は万世に太平を開き給ふ皇室を尊崇し至誠以て國体を護持す」とあり、第三には「我等は世界の和親を旨とし平和國家の確立を期す」と定められていた³⁷。

九月一九日から二〇日には首相官邸でキリスト教関係者を招いた一連の行事が行われた。東久邇宮は一九日に三つの宗教団体（神道・仏教・キリスト教）の代表者を首相官邸に招き「戦時中、わが國民の道義は戦争の混乱のため極度に低下したから、宗教家が發奮して、國民道徳を振起してもらいたい」³⁸と挨拶した。翌日の二〇日、首相官邸で令旨伝達式が行われた³⁹。東久邇宮は「国

れ道義の向上を期待し得る」。木俣は石原莞爾の新聞記事から大きな影響を受けているので、この運動の淵源は石原に遡ると言える。「木俣敏終戦日記」五六頁、五四頁参照。横山春一『賀川豊彦傳』四一一―四二二頁参照。

この方針は翌々日の八月三十一日「第一回教団戦後対策委員会記録」の中で決議される。日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室編『日本基督教団史料集 第三卷』三九―四〇頁。

35 賀川豊彦「マッカーサー總司令官に寄す」『読売報知』一九四五年八月三〇日、二頁。

36 横山春一『賀川豊彦傳』四二二頁。横山によれば、この準備会は益富政助や木俣敏によって行われており、以下のような構想が練られていた。「首相を總裁に、文部大臣を會長に、賀川を理事長にして中央の組織をつくり、地方組織としては、地方長官を支會長に、各郡の出張所長又は郡教育會長を地方部長に、村長を支部長にして全國的倫理運動を行はう」。

37 「賀川先生の横顔」『火の柱』第四號（一九四五年九月）三〇頁。五綱領は以下のようになっていた。「一、我等は万世に太平を開き給ふ皇室を尊崇し至誠以て國体を護持す。二、我等は懺悔反省し宇宙を貫く信念を養ひ道義の昂揚に努む。三、我等は世界の和親を旨とし平和國家の確立を期す。四、我等は勤労生活を尊び科学を愛し新日本を建設す。五、我等は社会奉仕を旨とし博愛精神に生く」。道義新生會はその後活動記録がほとんどなく、翌年には自然消滅していったと考えられる。

38 東久邇稔彦『東久邇日記』二四一頁。

39 横山によれば、これに参列したのは、富田満、賀川豊彦の他に日本基督教団の各局長、全国各教区長、特別常議員など、天主教教団（カトリック）からは土井辰雄他三名であった。横山春一『賀川豊彦傳』四二三頁参照。

際間ノ理解ト親善トヲ促進シ以テ世界永遠ノ平和ノ為」また国民の「道義昂揚」の目的を達成するため「キリスト教ヲ通ジテ諸君ガ一層努力セラレムコトヲ願ヒ致シマス」と述べ、最後に「道義及ビ文化ノ高キ平和的新日本ヘノ第一歩ヲ踏み出シタイト思ヒマス」と結んだ⁴⁰。この「平和的新日本」という文言が「平和国家」という言葉の由来にあたることはすでに述べた。教団統理富田満は答辞で「基督ノ御言葉ヲ確信シ新日本ノ建設ニ最モ重要ナル国民道義ノ昂揚ト国際親善、世界平和トノ為ニ基督教界、総力ヲ挙ゲテ尽シ以テ令旨ニ答ヘ奉リタク偏^{ひとえ}ニ念願致シテ已^やミマセヌ」⁴¹とこれに答えた。その後、東久邇宮は外国人宣教師を首相官邸に招き⁴²、戦争中のことを詫び、「将来も日本の道義向上のため努力していただきたい」と挨拶した⁴³。以上のように、東久邇宮はキリスト教を通して平和国家に基づく国際親善と道義昂揚の方針を内外に広げていくのであるが⁴⁴、これをコーディネートしていた重要な存在が賀川豊彦であった。

次に「国際平和協会」の設立である。この財団は賀川豊彦の肝煎りで実行され、「戦後の日本が国際復帰を図り、世界の恒久平和樹立への貢献する」ことを目的として東久邇宮の五万円の出資によって設立された⁴⁵。この協会の方針を事実上継承した雑誌「世界国家」は、国際平和協会設立の経緯を九月二〇日

40 日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室編『日本基督教団史資料集 第三巻』四三頁。

41 日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室編『日本基督教団史資料集 第三巻』四三頁。

42 このときに面談したのがフランス人ヨセフ・フロチャック師、米国人ジェームス・バーンス師、イタリア人チマチ師、ドイツ人グルノー・ピッテル氏、横浜関東学院クレシット夫妻などであった。東久邇稔彦『東久邇日記』二四二頁参照。東久邇稔彦『私の記録』二二一頁参照。

43 東久邇稔彦『東久邇日記』二四一―二四二参照。

44 「キリスト教団では、この令旨にしたがって、國民總懺悔運動を実施する方針をたてた。翌二十一日午前十時半からYMC Aの二階で令旨傳達式が行はれた」。横山春一『賀川豊彦傳』四二三頁。

45 伴武澄「前書き」『世界国家』（世界連邦建設同盟編集国際平和協会、一九五〇年）Toyohiko Kagawa. The Way to World State (Japanese Edition) (p.3). Association for World Peace Japan. Kindle 版。出資額について十万円と記憶しているものもいる。武藤富雄編『百三人の賀川伝（下）』（キリスト新聞社、一九三六年）一五三頁。

の令旨から繋げているが⁴⁶、協会の構成メンバーと官邸に招かれたキリスト教関係者は異なっているので、厳密に言うとは別組織である⁴⁷。しかし、どちらも賀川豊彦によって企画実行されおり、賀川の中で両者は一対となっていたので、周辺でも同様に受け止められていた⁴⁸。九月二七日首相官邸で創立総会が開催され、「終戦後、日本で生まれた最初の平和団体」⁴⁹として誕生した。「八月十五日の大詔^{〔たいしやう〕}を奉戴して、全く新しい平和運動を起さうと思ふ」⁵⁰と挨拶した賀川は、その綱領を自身で執筆し、第一を「我等は萬世に太平を開き給ふ詔勅^{〔ほうたい〕}の精神を奉戴して、世界平和に貢献せんとす」した⁵¹。ここから分かる

46 「九月二〇日、東久邇首相官は賀川氏の描いたプランにもとずき、まずその主な人々を首相官邸に招き令旨を伝えたが、中でも、平和運動への協力を力強く要請しているのである」。村島歸之「世界国家の歩み」『世界国家』一九五四年二月号。Toyohiko Kagawa. The Way to World State (Japanese Edition) (p.8). Association for World Peace Japan. Kindle 版。『世界連邦運動二十年史』では「9月20日、東久邇は賀川のえがいた青写真にもとづき、これはと思う人びとを首相官邸に招き、賀川とともにその趣旨を説明して賛同を求めた」とあるが、ここではキリスト教関係の存在（令旨）がまったく消えており、事実を誤認していると思われる。世界連邦建設同盟編『世界連邦運動二十年史』八一頁参照。

47 有馬頼寧、徳川義親公、岡部長景子、田中耕太郎、関屋貞三郎、姉崎正浩、堀内謙介、安藤正純、荒川昌二、三井高健、河上丈太郎。常務理事には鈴木文治、小川清澄、笈光顕。村島歸之「世界国家の歩み」。Toyohiko Kagawa. The Way to World State (Japanese Edition) (p.12). Association for World Peace Japan. Kindle 版。

48 たとえば小崎道雄は「賀川さんの事業は計画はよいが、ものにならないものが多い」と発言し、ものにならない事業として「キリスト新聞」と並んで「道義新生会と国際平和協会」を例証としたが、当時の人々は国際平和協会をキリスト教活動と同一視していた。実際に、一九四五年十二月二十二、二十三には教団と国際平和協会・道義新生会の共催で日米クリスマス音楽大会が催され、賀川豊彦が講演した。武藤富雄編『百三人の賀川伝（下）』一五三頁参照。東京教区史編集委員会『東京教区史』（本基督教団東京教区、一九六一年）一一一頁参照。

49 村島歸之「世界国家の歩み」『世界国家』一九五四年二月号。Toyohiko Kagawa. The Way to World State (Japanese Edition) (p.8). Association for World Peace Japan. Kindle版。

50 横山春一『賀川豊彦傳』四二三。

51 『朝日新聞』昭和二十〔一九四五〕年九月二八日、一頁。村島歸之「世界国家の歩み」『世界国家』一九五四年二月号。Toyohiko Kagawa. The Way to World State (Japanese Edition) (p.8). Association for World Peace Japan. Kindle 版。横山春一『賀川豊彦傳』四二三。

ように、賀川は終戦詔書の「万世に太平を開く」という昭和天皇の意思を実行すべく、平和運動を展開した。当初「総裁には東久邇宮を推載することに決定した」⁵²が、十月五日内閣が瓦解し、「〔東久邇〕宮は平和運動から遠のかれたので⁵³、実現しなかった。

倉橋克人は「国際平和協会は、他ならぬ首相の東久邇の肝入りで設立された」⁵⁴と指摘するが、東久邇宮の日記には原本を含めてこの日の財団設立の記述がないことから再検討する必要があるだろう。東久邇宮が「平和」という文言を積極的に用いるのはアメリカとの親善関係構築においてである。既述したようにマッカーサーとの会談で「平和新日本を建設するために努力したい」⁵⁵と述べた東久邇宮は、GHQや天皇とも会見した米国教会使節団との面談で「道義と文化の高き平和的新日本を建設せんとす」⁵⁶と述べた。特に、米国教会使節団との面談の様子を詳細に記述していることから、彼がこの会談に高い関心があったことが伺える。つまり、東久邇宮は対外的な親善関係の構築のためにキリスト教を通して「平和国家」日本再建の方針を占領軍やアメリカ人宣教師に主張していたが、国内的に「平和国家」を浸透させる意識は低く、民間運動については賀川に委ねていたと言える。その意味で、「国際平和協会」の設立は東久邇宮の肝入ではなく、賀川の思い入れが強かったと言える。

この後、共産党員の出獄を契機に天皇制の存否に対する世論が強くなってくると、賀川は「日本社会党の組織を手伝い天皇制の存置と食料確保に努力した」⁵⁷と述懐しているように、天皇制擁護を全面に出した。一九四五年九月二

52 『朝日新聞』昭和二十〔一九四五〕年九月二八日、一頁。村島歸之によれば当初「近衛文磨らを顧問に推す考えであった」が、近衛が自害したため、これも沙汰止みとなった。村島歸之「世界国家の歩み」『世界国家』一九五四年二月号。Toyohiko Kagawa. The Way to World State (Japanese Edition) (p.13). Association for World Peace Japan. Kindle 版。

53 村島歸之「世界国家の歩み」『世界国家』一九五四年二月号。Toyohiko Kagawa. The Way to World State (Japanese Edition) (p.13). Association for World Peace Japan. Kindle 版。

54 倉橋克人「戦後キリスト教の道標——賀川豊彦と戦後天皇制」七五頁。

55 東久邇稔彦『東久邇日記』二三七頁。

56 「東久邇宮日記」一九四五年十一月九日。

57 賀川豊彦「神の国運動よりキリスト運動へ」『火の柱』第三九号（昭和二三〔一九四

二日に行われた日本社会党創設の準備懇談会において、賀川が「無産政党の再出発——君主制民主主義の方へ」⁵⁸と題する講演をしたところにも表れている。その中で賀川は「公明なる方法をもつて大詔^{〔たいしやう〕}に拝する如く、万世のために太平を開くとの大御心を体し恩讐^{おんしゅう}の彼方に敵をも愛する精神をもつて、新政党を茲に樹てなければならない」と訴えた⁵⁹。十二月にも『デモクラシー——民主主義とはなにか』の中で「私は三五年間の長きに互る無産者運動において皇室中心の国体護持を考へてゐた」と告白し、「日本においては、主権は永遠に道徳即政治を把握し給ふ皇室を中心とせねばならぬ」と国民に訴えた⁶⁰。

ところが、一九四六年六月以降、賀川の記事から天皇に関わる記述が姿を消していく。倉橋克人はこのことに関して、「新憲法制定下で象徴天皇制が確立

八] 年八月五日) 賀川豊彦関係史料双書三、第三巻復刊第一号—一八九号(緑蔭書房、一九九〇年)所収、二七八—二七九頁。

58 賀川豊彦「無産政党の再出発——君主制民主主義の方へ」『賀川豊彦全集 第二四巻』四一九—四二二。

59 賀川豊彦「無産政党の再出発——君主制民主主義の方へ」四一九頁。賀川は皇室の優位性を次のように語る。「明治維持以後、日本が、組織ある進歩をなし得たのは全く皇室を中心とする統一性による創造のお陰であつたと云うことが出来る。……統一性のある所皇室は社会連帯の表徴であり、国家を救ひ給ふ力は万世に太平を開き給ふ、救済力として現れたのであつた」(同書、四二一頁)。同様の内容は一九四六年六月に出版された『新生活の道標』でも以下のように語られている。「その八月十五日以後、我国が世界史上にも稀な敗戦の状態とその拾収、進駐軍の接受等々が平靜に行はれたことは国民の等しく銘記するところである。統一性のあるところ、皇室は社会連帯の表徴であり、国家を救ひ得る力は、万世に太平を開き給ふ救済力として現はれたのであつた」(賀川豊彦「新生活の道標」『賀川豊彦全集 第一三巻』五二—五三頁)。

60 賀川豊彦『デモクラシー——民主主義とは何か』(時事通信社、一九四五年)三〇頁。倉橋克人「戦後キリスト教の道標——賀川豊彦と戦後天皇制」八四頁より引用。該当箇所は以下になる。「道徳的であらせ給ふ皇室は、私にとつては、余り卑俗な譬へかも知れないが、一種の恋人である。それで私は三五年間の長きに互る無産者運動において皇室中心の国体護持を考へてゐたけれども、職業的右翼主義者と間違へられることを恐れて、周囲の者だけにそれを説いて来た。然し今日になつては国体の変革さへ考へる者が出て来たので、最早黙すことは出来ない。私は敢へて、長年民主主義運動を継続し、その為に捕縛せられ獄に投ぜられながら無産者解放の為に努力して来た者として国民に訴へる。即ち、日本においては、主権は永遠に道徳即政治を把握し給ふ皇室を中心とせねばならぬということ」。

し、少なくとも政治の舞台においては天皇制廃絶の趨勢が認められなくなった時、彼にはもはや以前のような皇室護持論を標榜する必要がなくなったからである」⁶¹と分析する。その後、賀川の平和活動は雑誌『世界国家』の名称が表すように、「世界連邦運動」のイメージが残り、ビキニ環礁での水爆実験を契機として世界平和へと向けられた。

「平和国家」という文言は開院式勅書作成過程における漢学者川田瑞穂の添削によっているので、東久邇宮も賀川豊彦もこの文言を用いることは滅多になかった。しかし、敗戦直後の賀川の平和論は「統一性のあるところ、皇室は社会連帯の表徴であり、国家を救ひ得る力は、万世に太平を開き給ふ救済力として現はれたのであつた」⁶²とあるように、一君万民による争いのない国家統治に基づく平和であり、戦前の国体思想に基づいていた。実際に彼自身「天皇制の存置」⁶³や「皇室中心の国体護持」⁶⁴を訴えていた。このことから「賀川氏の揮ふタクトによって、日本の輿論が形成され左右される現実を注視せよ」⁶⁵とされていたように、国体思想に基づく平和の理念が民間に浸透していったと考えられる。しかし、賀川の活動が「世界国家」に集中することにより、「平和国家」に昭和天皇との結びつきが忘れられ、非戦・反核平和の運動と結びついて用いられるようになったと考えられる。

* 本研究はACL研究プロジェクト研究助成とJSPS科研費19K00085の助成を受けたものである。

61 倉橋克人「戦後キリスト教の道標——賀川豊彦と戦後天皇制」一〇一頁。

62 賀川豊彦「新生活の道標」『賀川豊彦全集 第一三巻』五二―五三頁。

63 賀川豊彦「神の国運動よりキリスト運動へ」『火の柱』第三九号、二七八頁。

64 賀川豊彦『デモクラシー』三〇頁。倉橋克人「戦後キリスト教の道標——賀川豊彦と戦後天皇制」八四頁より引用。

65 賀川豊彦・佐野學『天皇制と民主主義/日本民主革命』（清話會、1946年）の扉に記された紹介文〔国立国会図書館デジタルコレクション〕。